

富山進化論

平成のその先へ

<18>

「これを『エ小僧』に投入すれば水素をつくれます」。高岡市オフィスパークにあるアルハイテック企画営業部長兼技術部長の麻生善之さん(44)が、1.4四方のアルミ箔を見せながら、小型冷蔵庫のよさげな装置を指さした。

エ小僧はアルミをアルカリ水溶液と化学反応させることで水素をつくり、燃料電池と組み合わせれば発電できる。アルハイテックが自社開発し、2017年に製品化した。同社はトナミホールディングス(同市昭和町)など県内外の企業が出資し、13年に設立した。富山の基幹産業であるアルミに着目し、脱炭素社会の実現に向けた循環型エネ

ルギーシステムの技術開発に取り組んでいる。アルミは工業用資材としてはもちろん、光を遮断して品質を保つ特徴があり、医薬品や菓子の包装など日用品にも多く使われている。エ小僧は、工場の廃材や家庭ごみから取り出したアルミからでも水素をつくるのが可能だ。紙パックの場合は、機械で樹脂付きアルミとパルプに分離する。次に乾留炉で樹脂を燃焼し、アルミだけを取り出せば完了。パルプも紙の原料に再資源化され、二酸化炭素の削減効果があるという。

「持続可能性」。近年、企

第3章 ものづくりの力

⑥ 再生エネ

循環型社会の扉開く

業の経営活動を考える上で欠かせない言葉だ。国連の持続可能な開発目標「SDGs」は、17分野で30年までの数値目標を定めている。日本はこ

未来都市」に選ばれた。北陸3県の行政や経済など約70団体で構成する「北陸アルミ水素将来ビジョン検討会」は18年秋、アルミ水素の

燃料電池車(FCEV)や家庭、オフィスでの電源利用など、産業と暮らしの両面で40年までの目標を設定。座長の富山大学院理工学研究部教

のレンタル事業を始めた。南砺市ボランティア連絡協議会福野支部は同月、会員が回収した紙パックから取り出したアルミを利用し、発電し

ク専務の水木伸明さん(59)は「現段階では1台300万円、600万円、100万円前後となるようさらに改良を進めたい」と話す。水木さんは元々トナミ運輸の社員で、構想段階から中心的役割を担ってきた1人だ。「化学はすぶる素人」と謙遜しつつ、持続可能な社会が到来する未来を思い描く。「地域と協力し、富山発のエネルギー革命を起こす。それが大きな目標です」

れに基づき八つの優先課題を定め、富山市は推進に向けて国の支援を受ける「SDGs

普及に向けたロードマップを作成した。目指すは「エネルギーの地産地消」だ。

授、川口清司さんは「富山はアルミ産業が盛んで豊富な廃材を有効に使える。SDGsの考えと合致する」と話す。

た電力を研修会のマイクの電源にした。支部長の長井久美子さん(76)は「再資源化を体験でき、日頃の活動の励みになった」と言う。

環境への優しさがより求められる。ポスト平成。循環型社会の扉を開く技術に、富山のものづくりの精神は脈々と受け継がれていく。

アルハイテックは、アルミ期待されるエ小僧は、普及に向けて販売価格の抑制が今後おつと、18年11月からエ小僧の課題になる。アルハイテック

「第3章おわり(高岡支社編集部長・村田仁美、同部・荒瀬洋介、七瀬智幸、市江航大が担当しました。第4章は3月上旬に始めます。テーマはくすりです)」



アルミを使い「エ小僧」で水素をつくる仕組みを説明する麻生善之さん(右)＝アルハイテック

国の水素基本戦略 2017年に決定し、水素利用拡大の方向性やビジョンを示す。30年度に温室効果ガスの排出を26%減とする目標を踏まえ、30年段階では水素で走る燃料電池車を80万台、バスを1200台、フォークリフトを1万台普及させる。発電と合わせた水素使用量は年間30万トを想定。